国語

（その１）

一、次の文章は、七十五歳になる「桃子さん」が、東京オリンピックの開催された年（一九六四年）にほぼ決まりかけていた縁談を投げ出して、故郷の岩手を飛び出し上京した当時を回想した場面である。これを読んで後の問いに答えなさい。

上野駅に降り立ったときのあの心細さ、それでいながら何とも言えない解放感を桃子さんは今に忘れない。たいへんなことを仕出かしてしまったという思いはあった。が不思議と後悔はなかった。もう引き返すことなどできないのだ、ならば後悔なんかしない、と自分に言い聞かせて。でもすぐにそんなことも不要になった。目新しさ、何もかも新鮮で心を奪われて、それに後悔だのなんだの後ろ向きのことを考える前に、まずここで働いて食べていかなければならないのだ。仕事を探した。何でもよかった、＊1住み込みという条件さえクリアできれば。すぐに蕎麦屋の店員募集の張り紙を見つけた。東京オリンピックに沸くこの街で贅沢さえ言わなければ何とかなりそうな気もした。あの頃は若かったのだ、疲れというものを知らなかった。夢中で働いた。店の雰囲気にもすぐになれたし、重い＊2岡持ちを持って配達するのも苦ではなかった。店の近隣の道もすぐに覚えられたし、心配していた言葉にもすぐに馴染めた。生まれた時からこの街にいるようにだって装えばできそうな気もした。今はaセマいこの部屋だけど、ゆくゆくはアパートを借りて一つ一つものを揃えて、そう思うだけで楽しかった。実際、あの頃はお菓子の入ったきれいな缶から一つ手に入ったただけで、それだけで部屋が明るくなった気がしてうれしかったものだ。

豊かになることがそのままきらきらした目標だった。

あの頃、痛く突き刺さった言葉がある。

蕎麦屋をやめてすでに何軒か店を替えていた。大衆＊3割烹の店で＊4朋輩の子のひとこと、桃ちゃんてさ、わたしっていう前に、必ずひといき入れるんだよね。山形から出てきたトキちゃんという子だった。目がくるくるよく動く子でその子がいたずらっぽい目つきでそういった。①背中に冷や水をかけられた気がした。

確かにそうだった。子供のころからずっと、わたしという言葉への憧れと反感、いや、むしろ＊5おらという言葉にたいする蔑みと愛着、それらが入り混じって、わたしというとき一瞬混乱して滞る。分かっていたのだ。でも人に気づかれていたとは知らなかった。

いったい、いまさら自分は何に拘っているのだろう。飛び出してきた父や母や親戚の人がたへの済まなさであるのか、それもあるかもしれないがそんなことはもうたいがいA払拭したはずだ。親は親。子は子だ。親の足元を離れ独りで生きるのもそれはそれで潔い生き方でないか。だいたい中学を出たばかりのどれほどの人が集団就職で都会に出て来たか。少し遅れただけで自分もその中のひとり、少しも恥じることでないはずだ。

それでもトキちゃんの言葉は後々まで響いた。次第に口数が少なくなった。

不思議なことに口数が減ると、豊かさへのあこがれも減じていった。飾りたてるという喜びが失せてきた。どんなに頑張ってみたところで所詮豊かさの辺縁にいるのだ、という思いもあった。

いつまでたっても追い付けない。桃子さんの夢だったものは次第に遠くにかすんで色褪せていった。

その頃だったろうか。あの夢を見たのは。

八角山の夢。

八角山は桃子さんの郷里のぐるりを取り巻く山の中で一番高い山である。

＊6ばっちゃは朝晩手を合わせていた。信仰の山でもあった。

だが、鍋を逆さに伏せたようなてっぺんが丸こくて凡庸な何とも冴えない山なのである。

桃子さんはこの山が嫌いだった。桃子さんの小中学校には毎年写生大会というのがあって、その日は丸一日思い思いに好きな場所に行って絵を描いて過ごす。桃子さんも画板と絵の具を持って張り切って出かけるのだが、周りを見渡しても何も描きたいものはないから、結局刈り取った稲をbカワかすための延々と続く＊7稲ばせと、その向こうの丸こい八角山を描くのが常だった。どこを見渡しても木と山と田んぼと、点在する家々のほかに何もない、つくづくとつまらない場所だと思った。その象徴があの八角山なのだ。そう思っていた。

その山の夢をトキちゃんと共用の暑苦しい四畳半で見たのだった。

山のてっぺんが間近に見えた。

どうやら桃子さんは山の麓の古い木造校舎の廊下のようなところにいるらしい。

cキワクで囲まれたガラス窓が何段にも連なっている。小さな窓に分割された山がひときわ大きく全面に広がっていた。桃子さんは窓ガラスの一つに食い入るようにして山を見上げている。

夜、だった。
月明かりに照らされた山が壁のように眼の前にあった。山は雪に覆われていて、てっぺんの木々の梢に降り積もった雪までがはっきりと見て取れた。神々しくてしんと静まり返って人を寄せ付けない、震え上がるような威圧感があった。
美しい、凍える、山。
息を呑んで、桃子さんはあの山に登りたい、登れるだろうか、と思っていて、でも登ったら帰れないと何故だか知っている。胸の底まで冷気が籠って息がつけなかった。桃子さんの孤独と山の計り知れない孤独とが向き合っていて、ちっぽけな自分が如実であった。対して山の圧倒的な大きさと威厳とを見せつけられて、桃子さんはしょぼくれてすがって泣きたかった。
はじめその山が八角山だと分からなかった。だがすぐにあれは八角山だ、八角山以外に考えられないと夢の中で思っていた。

②目覚めたときから、八角山は桃子さんの心にどっしりと居座った。あれほど嫌った陳腐凡庸の山は気高くすっくと立った山に変貌を遂げた。
家の裏から見上げた八角山の頂上が目のあたり、どのへんにあったかと考えるようになった。八角山の山容と故郷の風景がしきりに目に浮かぶようになった。自分のこだわりは結局あの山にあるのではないかと思ったりもした。地。その大きさ厚み。翻って今桃子さんが立っているところのはかなさ頼りなさ。今更ながら桃子さんが捨てて来たものの正体が分かった気がした。でも帰るわけにはいかないのだ。何とか踏ん張るしかない。
しばらくして、トキちゃんは故郷に帰っていった。そうなるとますます口数が減り、人に無愛想だと面と向かって言われてもただうつむくだけだった。丸こい八角山がかろうじて心を支えた。
そんなときだった。
昼飯時で店が一番忙しいとき、大きな声でおらは、おらはと話す声を耳にした。
後ろを振り返ると目をみはるような美しい男がいて、連れの男と話している。周りの好奇の目を意にdカイさないというか、そもそも気づいていないというか、B屈託のない笑顔で大きな声で笑う。笑った時の白い歯が印象的だった。
それが桃子さんと周造の初めての出会いだった。
どうやらその日から桃子さんは見違えるように元気になった。どの客にもにこやかに笑いかけ、機嫌よく仕事をこなした。
周造が来るたびに大盛りのライス、山盛りのサラダを出した。頼まれもしないのに何度もお茶をとりかえ、何度目かのときに周造は不思議そうな顔をして桃子さんを見上げた。
それから二言三言言葉を交わすようになった。
あるとき思い切って、八角山て知ってると聞いてみた。
周造の言葉やeヨクヨウが郷里の聞きなれたものと同じだったから、もしかしたらと思っていた。周造の言葉を待つわずかな間のC面映ゆさを何十年たった今でも忘れられない。
周造の美しさに気後れがしてそれでも周造を見つめずにはいられなかった。
周造は飛び切りの笑顔で覚えている、八角山でば、おべでる、と言った。
③桃子さんは震えた。今このとき、周造の耳にはどうと吹き抜けていく風の音が聞こえてはいないだろうか、目には光るブナの林が見えてはいないだろうか。
まさか、でも＊8虔十だ。あの宝石のような物語の主人公が目の前にいる。

雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ
青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見つけてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました

大好きで＊9そらんじてもいた物語の主人公に出会えた。
周造もうれしくて楽しくて仕方がないのだ、生まれたままの内心の喜びを素直に声に出して喜ぶ人なのだ。運命を感じた。この人のそばにいれば桃子さんの喜びも映えて倍加するのに違いない。
驚いたことに周造の見上げた八角山は円錐形の山容の美しい山だという。なんということはない、言ってみれば桃子さんは跳び箱を横のほうから眺め、周造は縦方向から見ていたことになる。互いに自分が見た山が八角山の正面だと言って譲らなかった。そして笑った。周造との距離が一気に縮まった。
付き合い始めデートを重ね、あるとき周造が真顔で、
＊10決めっぺ。ひとことそう言った。
結婚の申し込みだった。何の飾り気もない言葉、それがすとんと胸に落ちた。今思っても、あの言葉は周造そのものを言い表していたと思う。自分を飾るということを知らない、あきれるほど素直な心情、そこが桃子さんは好きだった。

（その3）

④たぶんあのあたりから桃子さんは東北弁に素直になれた。周造の繰り出す朴訥（ぼくとつ）な言葉が心地よかった。やはりこの言葉がいいと思った。この言葉が周造を映し、桃子さんを映すのだ。周造の純朴が桃子さんの底に流れる純朴を刺激し共鳴して、桃子さんはごく自然にうなずき、周造が笑って桃子さんも笑って、そこで二人の結婚が決まった。

（若竹千佐子（わかたけちさこ）「おらおらでひとりいぐも」より）

＊1　住み込み…職場に住みながら働くこと。
＊2　岡持ち…出前の際に料理や食器を入れて運ぶ箱。
＊3　割烹…日本料理を提供する店。
＊4　朋輩…仲間、同僚。
＊5　おら…東北弁で「わたし」のこと。
＊6　ばっちゃ…おばあちゃん。
＊7　稲ばせ…刈り取った稲をかける木。
＊8　虔十…岩手県を舞台とした宮沢賢治の短編童話である「虔十公園林（けんじゅうこうえんりん）」の主人公の名前。
＊9　そらんじてもいた…声に出して覚えてもいた。
＊10　決めっぺ…決めよう。

問1　═線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問2　――線部A・B・Cの本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A「払拭した」
ア　忘れ去った
イ　あきらめた
ウ　解決した
エ　取り除いた
オ　覚悟を決めた

B「屈託のない」
ア　率直で遠慮のない様子
イ　明るく迷いがない様子
ウ　本心を包み隠すことがない様子
エ　少しの欠点もない様子
オ　全く関心がない様子

C「面映ゆさ」
ア　気恥ずかしさ
イ　待ち遠しさ
ウ　心細さ
エ　楽しさ
オ　誇らしさ

問3　――線部①「背中に冷や水をかけられた気がした」とありますが、このときの「桃子さん」の気持ちとはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　東京での新生活に上手く馴染(なじ)めるかどうか不安だったが、案の定「わたし」と言う時に故郷の名残が出ていることを「トキちゃん」に気付かれていたと知り、その不安がさらに強まっている。

イ　故郷と決別し、夢にまで見た東京での新生活にも馴染め、あこがれていた豊かさを手に入れつつある自分が「トキちゃん」から嫉妬されていたと知り、人間関係への新たな不安を感じ始めている。

ウ　東京での新生活に少しずつ慣れ今後に希望を持っていたのに、「わたし」と言う前の不自然さを「トキちゃん」に気付かれていたと知り、驚くと共にこれからの生活への意気込みがくじかれている。

エ　新生活を求め故郷から東京へ出て来て、あこがれていた豊かさを手にしたかのように思っていたが、「わたし」という言葉すら自然に使えない自分にはそれは所詮無理なことだったと絶望している。

オ　故郷から意を決して東京へ出て来たものの、東北育ちの自分が自然に「わたし」と言えないことを揶揄(やゆ)する東京の人間の冷たさに直面したことで、落胆しつつこれからの生活を心配している。

問4　――線部②「目覚めたときから、八角山は桃子さんの心にどっしりと居座った」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　夢の中で見た八角山が凡庸な冴えない山などではなく、人を寄せ付けない震え上がるような威圧感を与える山であることに気付き、強い恐怖を覚えたから。

イ　夢の中で見た八角山から圧倒的な大きさと威厳を見せつけられて、東京での孤独に苦しむ自分の中に帰郷してでも近づきたいという強い欲求が生まれたから。

ウ　夢の中で見た八角山は小中学校を過ごした良き故郷の象徴であったと思い出し、その威厳ある姿は自分の原点として今後も大切にしたいという強い思いに駆られたから。

エ　夢の中で見た八角山の圧倒的な威厳を感じ、その存在感が東京で孤独や様々な困難を抱えていた自分を明るく豊かな生活に導いてくれたと感謝したから。

オ　夢の中で見た八角山に昔は気付かなかった威厳を感じ、現在の東京での頼りない自分と比しての揺るがない存在感に畏敬の念を抱き、自分の心の拠(よ)り所と考えたから。

問5　――線部③「桃子さんは震えた」とありますが、それはなぜですか。八十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問6　――線部④「たぶんあのあたりから桃子さんは東北弁に素直になれた」とありますが、これはどういうことですか。百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問7　この文章の表現についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　「トキちゃん」（14行目）というカタカナ表記は、名前にどのような漢字を当てるかを知る程までには仲良くなれなかった「桃子さん」と「トキちゃん」との関係性を暗示している。

イ　「確かにそうだった」（16行目）などのような「桃子さん」自身による独白と語り手からの描写とが混在することで、「桃子さん」の内面の葛藤がより重層的に表現されている。

ウ　「周造の美しさに気後れがしてそれでも周造を見つめずにはいられなかった」（71行目）という表現は「周造」の外見に警戒しながらも、純朴さに魅かれつつある「桃子さん」を表している。

エ　「そして笑った」（84～85行目）という表現には、「桃子さん」と「周造」が自分の抱く八角山像を譲らないことで逆に八角山を大事にしていると分かり、故郷への愛着を共有出来た喜びが表されている。

オ　「決めっぺ」（87行目）という「周造」の言葉には、大切なことは標準語ではなく東北弁で話すべきだという、自身の生まれ育った地の言葉を尊重する姿勢が表れている。

二、次の文章は、映画やアニメなどの舞台やゆかりの地を訪れる旅行形態の総称であるコンテンツツーリズムについて論じた文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

コンテンツツーリズムは、近年急速に高まった、映画の「ロケ地巡り」やアニメの「聖地巡礼」の人気を受けて使われるようになったかなり新しい言葉ではあるが、それに類する行為自体は、決してそれほど新しいものではない。

それにもかかわらず、コンテンツツーリズムが地域おこしと絡んで、主として経済的な観点から脚光を浴びる一方で、その文化的な意義や役割を芸術研究の側から評価し、解明するような動きはこれまでaトボしかった。作品の舞台や作者のゆかりの場所に行くことが、その場所の雰囲気や情緒を知り、作品の理解に＊1資する補助的な体験として評価されるくらいのことはあっても、それ自体はあくまでも脇役にすぎず、重要なのは「作品そのもの」の理解や解釈の方だ、というような見方をされることが大半だったのではないだろうか。

芸術研究は、長いこと、作者や作品に焦点をあわせ、最終的にそこに着地させることを目指す「作品中心主義」とも言うべき考え方をベースに展開してきた。十八世紀末から十九世紀にかけて西洋において近代的な芸術概念が確立してゆくとともに、芸術作品は、作者の人格や個性の表現された小宇宙として認識されるようになってゆく。そういう中で作品鑑賞の本来のあり方は、作者の精神の＊2所産であるこのかけがえのないbユイイツ無二の小宇宙を味わい尽くすことであると考えられるようになった。そういう考え方にたってみるなら、たとえそこに描かれている世界が、どれほど身の回りの日常よく知っている場所の風景に似ていたとしても、それは作者の作り上げたかけがえのない小宇宙の中で必ずや何らかの特別な意味を担うものとして描かれているはずであるから、そこから作者の表現を＊3捨象して日常的な世界にcカンゲンしてしまうようなふるまいは、芸術作品の本来の鑑賞のあり方に＊4悖るものだということになる。

作品を、その場所の当時のあり方を伝える＊5ドキュメントのような形で取り扱うなどということが、芸術の本質から著しく逸脱したこととされたのは、そのような考え方からすれば当然のことであった。最近では、芸術とそれに関わる場所との関係に焦点をあわせた研究も決して少なくはなくなったのだが、そういう場合でも最終的には、＊6テクストとしての作品がメインに据えられ、場所の方はつねに、その背景にあるX＊7コンテクストとしての役割にとどまるほかなかった。＊8ユトリロの描いたパリや＊9小津安二郎の撮影した東京の状況が取り上げられる場合でも、そのことが意味をもつのはあくまでも、それらが彼らの表現にとって何らかの役割を果たしているという限りでのことであり、鑑賞の重点が作者を離れて、そこに描き出されている当時のパリや東京の状況を理解するという側に移ってしまった途端に、①そういう鑑賞の仕方は邪道のレッテルをはられることになってしまったのである。

しかしながら、一九八〇年代頃から芸術研究に生じた一連の新しい動きの中で、こうした見方は明らかに変わってきている。それまで自明のものと思われてきた、作品と作者との関係や、そういう中での作品鑑賞の「正しい」あり方についての考え方自体が、歴史的、文化的に規定されて生じたものにほかならず、きわめてY＊10なものであったことが認識されるようになった。西洋以外の文化、また西洋においても近代以前の文化に関してはそれとは違った捉え方が必要であることが認識されるようになったばかりでなく、当の西洋近代においてすら、文化としてトータルに考えるならば、それとは違ったあり方が機能していた局面が多々あったことも明らかになりつつある。

そのことは、芸術作品とそれに関わる都市との関係のあり方についても新たな見方をもたらすことになった。芸術作品について、「作品そのもの」を解釈されるべきテクストとして位置づけ、それと関わる都市をそのコンテクストであるとするような固定観念を一端dタナ上げしてみると、逆に都市の側を読み取るべきテクストとして設定し、それに対するコンテクストとして芸術作品を位置付けるというような考え方も可能になってくる。ポピュラー音楽研究者である＊11サラ・コーエンは、＊12ビートルズの音楽と彼らが生まれ育ち、活動した都市＊13リヴァプールとの関係を論じる際に、そのような考え方を提示した。炭坑産業が＊14斜陽化したリヴァプールでは、一種の町おこし策として、リヴァプール出身であるビートルズを目玉とした観光政策を展開しているのだが、これはビートルズの音楽というテクストの背景となるコンテクストとしてリヴァプールという都市があるというよりは、逆の関係、つまり、リヴァプールの街というテクストに対してビートルズの音楽がそのコンテクストをなすという関係として捉える必要があるというのである。②リヴァプールの街のあちらこちらに、ビートルズの録音したスタジオだとか、メンバーの住んでいた家といったさまざまな「遺跡」が「発見」されて博物館などの施設になっており、市の観光局が作ったパンフレットなどに掲載されているモデルコースに沿って回ると（ちなみに、このルートに一番忠実に回っているのは日本人だとコーエンは書いている）、ビートルズの活動がたどれるという寸法だが、同時にこれはリヴァプールの街を「ビートルズの街」として認識し、ビートルズの活動というストーリーを背景にこの街を理解するということである。そして、そのようなルートに沿って歩くと、行く先々でビートルズの音楽が鳴り響いており、人びとがまさにビートルズの音楽という「コンテクスト」を背景としてこの街を読み解いてゆくための装置となっているというのである。まさに「逆転の発想」によって、芸術体験の中にある、これまでの捉え方では抜け落ちてしまっていた側面をすくい上げることに見事に成功した事例と言えるだろう。

（その６）

もちろんだからといって、従来の芸術体験の中で積み上げられてきた作品解釈などの蓄積が無効になり、都市体験の中に解消されたというように理解してはならない。作品と都市の両者の間にあるテクストとコンテクストとの関係を逆転させるということは、単に逆転して終わりという話ではなく、その両者が一種の＊14弁証法的な関係のうちに置かれるというようなモデルで捉えるべきことであろう。③そこに生ずる不断の相互作用によってそれぞれに奥行きが付け加えられ、どちらにもなかった第三の次元がひらかれてくるということが重要なのであり、それこそがまさに作品世界と芸術世界との＊15虚実皮膜の間（かん）にあらわれてくる豊かな広がりを可能にしていると考えるべきなのではないだろうか。

近年流行のコンテンツツーリズムが、いささか＊16皮相的に流れ、そのさまざまな可能性を十分に発掘できていないのではないかというｅキグにしても、他方で芸術研究の側の「作品中心主義」的な志向が強すぎるあまり、「芸術と都市」といった問題意識を都市の側についての知見として発展させることができなくなっている状況にしても、テクストとコンテクストの間に作用しているこのような相互作用を十分に捉えることができていないために、一方向的な展開にならざるをえなくなったところに大きな問題があるように思えるのである。このあたりの捉え返しが本格化してくることで、状況は大きく変わってくるのではないだろうか。

（渡辺（わたなべ）裕（ひろし）「まちあるき文化考」より）

＊１　資する…役立つこと。
＊２　所産…生み出されたもの。
＊３　捨象…必要でないものとして切り捨てること。
＊４　悖る…反すること。
＊５　ドキュメント…記録。
＊６　テクスト…鑑賞されるべき対象。
＊７　コンテクスト…作品に関連する要素。
＊８　ユトリロ…フランスの画家（一八八三～一九五五）。
＊９　小津安二郎…日本の映画監督（一九〇三～一九六三）。
＊10　サラ・コーエン…イギリスの音楽研究者（一九六一～）。
＊11　ビートルズ…一九六〇年代に世界的な人気を誇ったイギリスのロックバンド。
＊12　リヴァプール…イギリス北西部の港湾都市。
＊13　斜陽化…産業や事業が衰退して勢いを失っていくこと。
＊14　弁証法…対立する意見や立場を調整し、それらを統合して新しい理解や解決策を導き出す方法。
＊15　虚実皮膜の間…江戸時代の浄瑠璃・歌舞伎脚本作者である近松門左衛門（ちかまつもんざえもん）の、芸術作品が虚構と真実の微妙な境界線にあるとする考え方。
＊16　皮相的…物事の表面しか見ず、深みや本質を理解しないまま判断したり、見たりすること。

問１　――線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。

問２　空欄［X］・［Y］に入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

［X］
ア　普遍的
イ　閉鎖的
ウ　副次的
エ　創造的
オ　客観的

［Y］
ア　一面的
イ　意図的
ウ　一義的
エ　悲観的
オ　短絡的

問３　――線部①「そういう鑑賞の仕方は邪道のレッテルをはられることになってしまった」とありますが、それはなぜですか。八十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問４　――線部②「リヴァプールの街のあちらこちらに、ビートルズの録音したスタジオだとか、メンバーの住んでいた家といったさまざまな『遺跡』が『発見』されて」とありますが、『遺跡』が『発見』され」るとはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ビートルズの活動に関係する建物や場所が、実際にはそれほど古いものではないにもかかわらず、商業的な意図のもとであたかも昔から存在していたかのように演出され、利用されるようになったということ。

イ　ビートルズの活動に関係する建物や場所が、都市の理解や地域の活性化を目的とする観光政策のもと、文化的価値をもつ施設として見い出され、街の魅力を高めるために活用されるようになったということ。

ウ　ビートルズの活動に関係する建物や場所が、後世に受け継いでいかなければならない音楽文化としてそのまま保管され、都市の文化的背景とは切り離された展示物という形で公開されるようになったということ。

エ　ビートルズの活動に関係する建物や場所が、過去の出来事と深く結びついた歴史的な空間として注目され、保存の対象となった結果、地域の歴史を振り返るための象徴的な場であると認知されるようになったということ。

オ　ビートルズの活動に関係する建物や場所が、観光戦略の中で人々が鑑賞しやすいように整備され、古すぎて何の価値もないものから地域の経済的資源として新たな意味を付与されるようになったということ。

問５　――線部③「そこに生ずる不断の相互作用によってそれぞれに奥行きが付け加えられ」とありますが、「それぞれに奥行きが付け加えられ」るとはどういうことですか。【資料】に書かれている《北の国から》の事例を使って具体的に百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

【資料】

《北の国から》と言われれば、多くの方が、フジテレビ制作のこの大ヒットしたテレビドラマとともに、その舞台になった北海道の富良野（ふらの）の風景を思い出すことであろう。《北の国から》の本編となる連続ドラマが放送されたのは一九八一年から翌八二年にかけてのことだが、その後、一九八三年から二〇〇二年にかけて、計八話が長篇の「ドラマスペシャル」として放送され、登場人物たちのその後の成長や富良野の風景の変化が描き出されたため、人々があたかもそれらをリアルタイムで一緒に見守っているかのような状況が生じることになった。

ドラマの中の人物や出来事だけでなく、それを包み込んでいるかのような富良野の環境がこのドラマのリアリティを格段に増すことに貢献したということは言うまでもないが、逆に、現実の富良野の側も、このドラマの進行とともに新たなリアリティを獲得したという面を無視することができない。たとえセットで撮影された架空の街であっても、長期間にわたってそこを舞台としたストーリーが展開されれば、あたかもそれが現実の街であるかのようなリアリティをもってくることになる。極端な言い方をするなら、富良野の街も《北の国から》のセットのような性格を強めていくことになったのである。このドラマ以前の富良野は、数々の観光地を有する北海道の中で、どちらかといえば特徴のない街であり、観光地的な要素はほとんどなかった。北海道のちょうどまん中に位置することから「北海道のへそ」などと呼ばれることがあるということを別にすれば、あまり話題になることもなかった。それが、《北の国から》が人気を呼ぶことでロケ地としての富良野に焦点があたり、観光客が急速に増えることとなったのであり、そのことが富良野の街のあり方自体を変えてゆくことにつながったのである。

問６　この文章の内容についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　芸術作品の理解においては、作品そのものを中心に据え、そこに描かれた都市はあくまで補助的な背景として扱うべきであり、都市との関係性に注目する見方は作品の本質的な価値を曖昧にする可能性があるため、従来通り作品単体を解釈の対象とする姿勢が望ましいと論じられている。

イ　筆者は、芸術作品に描かれた都市の姿を現実の都市と重ねる鑑賞には慎重であるべきだという立場から、そうした見方は作品の本来の構造や主題を見失わせるおそれがあり、鑑賞者の自己中心的な解釈を助長することにもなりかねないため、問題視している。

ウ　リヴァプールの事例は、観光資源としてビートルズを活用し地域経済の活性化に結びつけた成功例として広く知られており、芸術作品は観光促進の手段として位置づけられているため、都市の文化的理解や芸術的価値の探究とは直接関係しないと考えられている。

エ　一九八〇年代頃から芸術研究において、それまで主流であった芸術概念が西洋近代における歴史的、文化的に規定された一つの見方にすぎないと相対化されていく中で、都市を理解するための手段として作品を捉える見方も受け入れられるようになっていったと述べられている。

オ　筆者は、近年のコンテンツツーリズムが芸術作品と都市との関係を深める新たな文化的手法として非常に上手く機能していると高く評価しており、作品の舞台を訪れることによって鑑賞者の芸術理解が自然に深まり、観光を通じて芸術体験の可能性が大きく広がっていくことに強く期待している。